

サルエビ産卵試験

一般に「ガラエビ」と呼ばれる全長10cm程の小エビは、主にサルエビ、アカエビ、トラエビで構成され（図1）、唐揚げや塩茹でで食べられています。底びき網漁業の主要な漁獲対象種であり、夏に漁獲の最盛期となりますが、漁獲量は減少傾向にあり（図2）、小エビ類の大半を占めるサルエビも同じ傾向にあります。

サルエビと同じ科に分類されるクルマエビでは、親のサイズが大きいほど、産卵数が多く、ふ化した幼生のサイズも大きいことが明らかになっています。また、この先行研究では、大型の親エビを含む幅広い体サイズの雌集団によって多様な幼生が産出されると、環境が変動しても生残に有利な幼生集団が残り、資源の安定に寄与すると考えられています。そこで、サルエビについてもクルマエビと同様な傾向が

見られるか、産卵試験を行いました。

試験は、底びき網漁業で漁獲されたサルエビの中から生殖腺の発達した雌個体を選び出し、大型水槽内に吊るした籠に1尾ずつ収容し、翌日の産卵数を計数するとともに、ふ化した幼生（図3）の体長を測定しました。その結果、サルエビでも親のサイズが大きくなるほど、産卵数が多く、ふ化した幼生のサイズも大きいことが明らかとなりました（図4）。

現在、底びき網漁業者が操業に用いる網の目合いを大きくし、小型のエビを保護する意識も高まっています。このような取組みは、サルエビの親サイズの多様性を確保する上でも重要と考えられ、今回の知見も資源管理の推進に向けて活用していきたいと考えています。

（海面・内水面増殖研究室：渡辺）



図1 小エビ類

（上から、アカエビ、トラエビ、サルエビ）



図3 サルエビ幼生

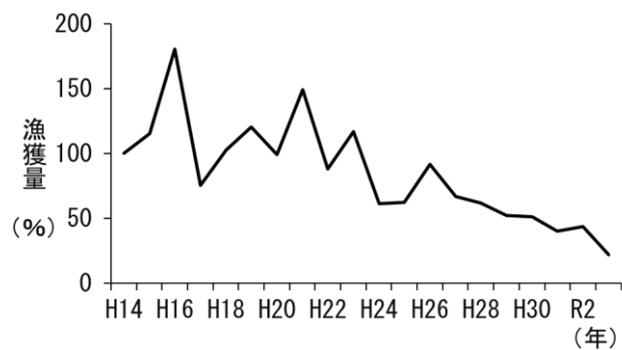


図2 岡山県内の小エビ類漁獲量推移

（H14年を100%として表示）

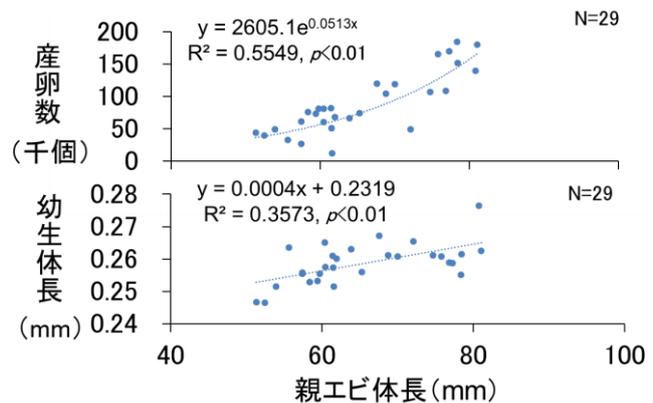


図4 親エビ体長と産卵数、幼生体長の関係